

胆力そして慚愧

昨年は世界的なパンデミック新型コロナ感染症の蔓延のニュースと対策に明け暮れた毎日だった。令和3年の十二支は「牛」、牛はよく働く誠実さ忍耐強さを象徴するよい動物として親しまれてきている。仏教が生まれたインドでは牛は神様として大切にされている。十二支の1番目はネズミで2番目が牛、どうしてか。昔、正月の夜明け神殿の門をゴールにした競走で、牛は前の晩いち早く出発した。ネズミは牛の背中に乗っていた。ネズミは神殿の門の前に着いたとたんに飛び降りて1番となり、牛は2番になった、というお話が多くの国に伝えられているという。



この牛の性格と強さを人間の精神力で言えば「胆力(たんりょく)」ということができる。「胆力」は、たいていの出来事に驚いたり恐れたりしないで、物事を受け入れて、やっつけのける精神力で、人生の正解を求める能力だ。お布施を喜んでする人、奉仕の精神に富んだ人、ボランティア活動を率先してできる人もそういう人だ。人間の弱さは、自分の身を守ることが第一で、他人からの頼まれごとには警戒心が先に出ることだ。過去のことに愚痴をこぼし、先々のことに憂い心配して、目の前の仕事がおろそかになるのも胆力の無さの仕業である。将来のやるべきことはしっかりと見据えて、うろたえずに日々の生活を喜んで楽しく暮らしていくように、誰とでも、何事にも、前向きに付き合っていきたいものだ。

本願寺の蓮如上人(1415~1499)の御文に『領解文』というのがある。この中に「われらが今度の後生の一大事」とある。その一大事にシニアはそろそろ気が付かないとチョコちゃんの「ボーっと生きてんじゃねーよ！」と叱られる。

キリスト教の教会に行くと懺悔(ざんげ)室といいのがある。懺悔というのは、神の前で自分の犯した罪を告白し悔い改めることをいう。懺悔という言葉は仏教ではあまり出てこないが、仏教では過ちを恥じて悔い改めることを「慚愧(ざんぎ)」という。よく知られているのはブッダが死の直前に説法したというお経「涅槃(ねはん)経」に書かれている。

「二つの白法あり、よく衆生を救う。一つは慚(ざん)、二つは愧(ぎ)なり」と。

慚は、自分から道徳上あるいは法律上の罪を犯さないこと、そして犯した罪には自らを恥じ、他人に恥じること。

愧は、他人に罪をつくらせないようにすること、そして他人に自らの罪を告白して、その許しを請い、天に恥じること。

「慚(ざん)」という漢字は立心偏の心に斬るという文字で出来ている。自分の心を自ら斬るのである。これがなかなか難しい。またそのような機会のない人生は平和であり穏やかである。多くの修行を積むこと、そして仏教の修行者には「人生やるからには必ずやり遂げねばならない」という強烈な覚悟を感ずるのである。

「愧(ぎ)」は立心偏に鬼という文字で出来ている。自分の心の中に鬼を見つめるのである。自分は誰よりもかわいいので、自分を悪者にはしない。多くの人との中でお説を聞いても都合の悪いことは他人のことだと聞き飛ばす。自己中心的に生きるのが自分だ。自分の中に鬼を見ることがない人は幸せだ。よい人たちに囲まれている。感謝する人生を送るのがよい。自分の心の中に鬼を見るとき、他人を責めるのではなく、他人と教えあって、ともに気づく人生が始まる。